

## 京都府・旧蓮華谷火葬場における弔う空間の設計

日大生産工(院) ○渥美 恒 日大生産工 篠崎 健一

### 1. はじめに

現代社会では、都市化や核家族化の進行により、人々が「死」と直接向き合う機会が減少している。

かつて葬儀は地域共同体の中で行われ、死者を見送りながら遺族や近隣が支え合う共同の行為であった。しかし現在では、葬儀は自宅から専用施設へと移り、葬送の一連の過程は効率化・専門化されている。

火葬場は、処理能力や運営効率を重視した施設計画が優先され、死者と遺族が交わる象徴的な時間と空間が失われつつある。京都市中央斎場の事例にみられるように、現代の火葬施設は合理性を追求するあまり、死と向き合う場としての意味が希薄化している。

本研究は、かつて京都市中央斎場の分場であり、現在は廃墟化する旧蓮華谷火葬場を対象に、現代社会における「弔いの空間」のあり方を再考するものである。

### 2. 人類の葬送観

人類は古来より死と向き合い、死者を見送り祈る行為を通して独自の葬送文化を築いてきた。

本章では、人類が営んできた葬送行為を整理し、葬送という営みの根源的意味を明らかにする。

#### 2.1. インドの火葬場

インドのヴァーラーナシーは、ヒンドゥー教の聖地として知られる。ガンジス川に面して張り出した河岸空間「ガート (ghat)」は、人々が沐浴や涼をとる場として日常的に利用される。一方、火葬の場としても機能している。遺族は、ガートに集まり、薪を購入して積み上げ、その上に遺体をのせてさらに積む。薪に着火し、6時間ほどで火葬が終わり、遺灰はガンジス川に流される。そうすれば輪廻からの解脱 (Moksha : モクシャ) を得ると信じられ、ヒンドゥー教徒にとつては最高の至福とされている<sup>1)</sup> (Fig.6)。



Fig.1 インドの火葬の様子

#### 2.2. チベットの天葬 (鳥葬)

チベットの葬法は、天葬 (鳥葬) が一般的である。「天葬台」と呼ばれる専門の場所で、魂が去った肉体を天葬師の手で小さな肉片に解体され、骨まで碎かれ、ツァンパ (チベット麦でできた食べ物) で丸められる。

天葬師の呼び声にはゲタカが集まってくる。この儀式は日が昇る前に全て終わるように進められる。

天葬は、チベット仏教において、天界に転生するため、優れた上昇力を持つゲタカに頼る意味深い葬礼方法である。また、厳しい自然、火葬を行う燃料の欠如、土葬になじまない岩石の中での葬法である<sup>1)</sup> (Fig.7)。



Fig.2 チベットの天葬の様子

#### 2.3. 沖縄の洗骨改葬

1970年ごろまで行われていた沖縄における一般的な洗骨改葬は、火葬処理をしていない遺体を棺に入れた状態で墓室空間に3～7年間安置して白骨化させた後、その遺骸を水や酒、布や紙などで洗い、再び墓に遺骨に安置する二次葬である<sup>2)</sup>。

洗骨を済ますことが仮墓から本墓へ移行する条件であることから、「死者から祖先になる過程において、最後の死の穢れを清める重要な役割」としている<sup>7)</sup>。

また、沖縄・奄美地方の小さな島嶼社会の自然環境からすれば、古い時代において燃料エネルギー (木材など) を必要とする火葬は、島の環境によっては人々に積極的に選択される葬法とも言い難い<sup>3)</sup> (Fig.8)。



Fig.3 沖縄の洗骨の様子 (1970年頃)

#### 2.4. 葬送の行為史とその機能

本章で取り上げた諸地域の葬送習俗は、死の理解が宗教的観念、自然環境、社会的機能といった要素によって成立してきたことを示している。

これらを比較すると、葬法は単なる遺体処理ではなく、思想観念や資源環境を映し出す葬送行為であることが明らかになる。また、葬送儀礼には必ず「場」を大切にし、火や水、鳥や山などの自然要素が存在する。

Design of a Space for Mourning at the Former Renge Valley Crematorium,  
Kyoto Prefecture

Hisashi ATSUMI, and Kenichi SHINOZAKI

### 3. 死と火葬場：火葬場の事例調査とその理解

歴史的に葬送の場は、人が死を受け入れ、見送り、祈るための空間であった。

本章では、火葬場事例を通して、葬送行為がどのように空間化され、建築が「死」とどのように向き合ってきたのかを考察する。宗教観や自然環境、地域文化との関係を読み解くことで、現代社会における火葬場の空間的課題を明らかにする。

#### 3.1. 世界の火葬場

##### 3.1.1. 「森の火葬場（Woodland Crematorium Stockholm）」（スウェーデン）

設計：エリック・グンナール・アスブルンド

火葬炉：4基

竣工：1937年

敷地面積：約750,000㎡

ストックホルム郊外にある市営の墓地で、75haの敷地に火葬施設・礼拝堂・墓域が周囲の自然にとけこむように配置されている。火葬施設はその中心的施設として建設され、大礼拝堂と二つの小礼拝堂、安置施設や焼却炉を備え、複数の葬儀が同時に行われても動線が交わらないよう計画されている。長大な石畳のアプローチは訪れる者に象徴的体験を与え、柱廊と石の十字架が厳粛な威容を示す。

また、今井一夫は「草の丘は、古代バイキング古墳を思い起こさせるのだが、これは、アスブルンドが骸骨に象徴されるキリスト教の暗い死よりもむしろ、古代の理想化された死の方により傾いていた、と理解しても良いのではないだろうか。」と述べる<sup>4)</sup> (Fig.1)。



Fig.4 森の火葬場 外観

##### 2.1.2. 「バウムシュレーンヴェグ・クレマトリウム」(ドイツ)

設計：アクセル・シュルテス

火葬炉：3基+増設スペース3基

竣工：1998年

建築面積：4,058㎡

ベルリン東部の墓地に併設された火葬場で、国際コンペを経て1998年に完成した。長方形のコンクリート建築の中央には29本の柱が林立する「木立ホール」が設けられ、屋根のガラス開口から自然光が柔らかく差し込む。中央の水盤を囲むこの空間は会葬者の共有の場であり、その周囲に大礼拝堂と二つの小礼拝堂が対称的に配置される。告別後、柩は昇降機で地下へ下ろされ、安置室や火葬炉へと導かれる。

こうした機能的な構成に加え、光と柱の重なりが生み出す神秘的な空間は、祈りと静謐を象徴するような死と向き合う場を形成している<sup>1)</sup> (Fig.2)。



Fig.5 木立ホール

#### 3.2. 日本の火葬場

##### 3.2.1. 「弘前市斎場」(青森)

設計：前川國男

火葬炉：5基+予備スペース1基

竣工：1983年

建築面積：1,706.67㎡

弘前市街地のはずれ、旧火葬場跡に建設された斎場で、背後に杉山を控え、遠方に岩木山を望み、周囲をりんご畑に囲まれた自然豊かな環境に位置する。施設は火葬棟、待合棟、そして両者を結ぶ渡り廊下から構成されている。炉前は津軽の風習に沿い、最後まで近づける大空間とされ、屋根は積雪と俯瞰の視線に配慮して耐候性鋼板の大屋根が架けられた。

日々多くの悲しみが訪れる場として、慰めの言葉はなくとも、窓越しに望む花や樹木の印象は忘れ難いものとして描写されている<sup>5)</sup> (Fig.3)。



Fig.6 弘前市斎場 外観

##### 3.2.2. 「風の丘葬斎場」(大分)

設計：槇文彦

火葬炉：5基+予備スペース1基

竣工：1996年

建築面積：2,514.50㎡

風の丘葬斎場は、市街地から約3km離れた丘陵地に計画された。古墳跡も発見されているこの地は、古来より葬送とゆかりをもつ場所である。3.3haの敷地は南を一般市民にも開放された公園、北を葬斎場に分けている。斎場棟・火葬棟・待合棟の三つの建物は中庭を介して緩やかに分節され、回廊や前庭は訪れる者を告別へ導く道を形づくる。火葬棟の中庭では水盤をめぐる動線によって、葬送行為が展開される。外装は斎場にレンガ、火葬棟に打放コンクリート、待合棟にコールテン鋼を用い、鉄や土に由来する自然素材として選択された。とりわけコールテン鋼の壁は地中に沈むように見え、建築とランドスケープが一体となった抽象的な風景を生み出している<sup>6)</sup>。こうして自然との融和を重んじることで、会葬者が風景の中で静かに思いを巡らせる葬送空間を形成している (Fig.4)。





Fig.7 風の丘葬斎場 外観

### 3.2.3. 「瞑想の森」 (岐阜)

設計：伊東豊雄

火葬炉：5基+増設スペース1基

竣工：2006年

建築面積：2,269.66㎡

瞑想の森市営斎場は、公園墓地整備の一環として建替えられた斎場である<sup>7)</sup>。南に広がる山、北に面する溜め池のほとりに位置し、屋根は山の輪郭と重なり、純白の自由曲面シェルが抽象的なランドスケープを描く。大屋根は鉄筋コンクリートの連続曲面構造で、4つの構造コアと12本の円錐柱に支えられている。屋根スラブの滑らかな曲面は屋内天井にも表れ、白色の仕上げと間接照明により柔らかな光が空間を包む。周囲には緩やかな起伏と樹木を配し、既存山との連続性を意図した commons の森として構成されている<sup>8)</sup>。

こうして屋根と光、柱による空間を通じ、自然と人が交わる静謐な葬送空間を成立している (Fig.5)。



Fig.8 瞑想の森 外観

### 3.3. 火葬場にみる文化的多様性と調和

世界と日本の火葬場事例を比較すると、葬送行為を支える動線や会葬者が静謐に過ごせる空間といった共通点が見られる。世界の事例はキリスト教的象徴を備えるものと、光や柱の重なりによって宗派性を相対化するものが併存しており、それらを通じて死と向き合う空間が表現されている。日本の事例は自然環境や風習との調和を重視し、風景の中で死と向き合う空間を形成している。こうした比較から、火葬場は単なる機能施設ではなく、死の捉え方や文化的価値観を映し出す建築であると言える。

### 4. 京都と死

日本都市史において初めて永続的な都市を成立したのが平安京である。政治的な計画都市として出発した平安京の都市構造において、死は都市内部から排除される対象であった。

「喪葬令」の皇都条には「凡皇都及道路側近、並不得二葬埋一」と規定され、平安京内に墓をつくることは禁止されていた<sup>9)</sup>。星野裕司は、「葬地や葬送を穢として都市や生活の場から排除した<sup>9)</sup>」と述べており、

死が都市空間の中で忌避される存在であったことを示している。

その結果、死者を葬る空間は都市の外縁に求められ、化野・蓮台野・鳥辺野などといった「葬送地」が形成されることとなった (Fig.9)。

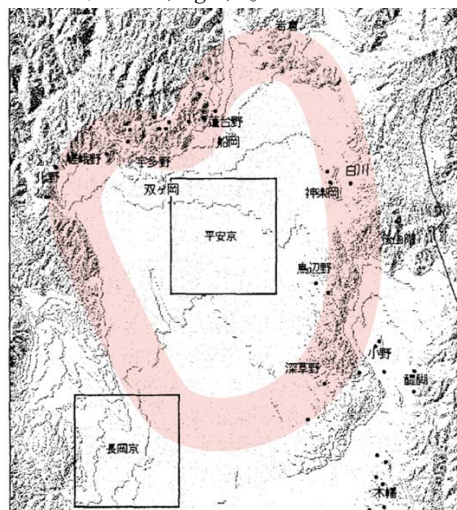


Fig.9 平安京の葬送地

### 5. 蓮華谷と死の空間

#### 5.1. 旧蓮華谷火葬場の年譜



Fig.10 旧蓮華谷火葬場の位置

表1 旧蓮華谷火葬場の歴史

西暦 (年号)	事項
1902 (明治 35)	私営で蓮華谷火葬場の前身、龍安寺火葬場を廃止 (蓮華谷火葬場のための立ち退き)
1904 (明治 37)	蓮華谷火葬場が市営火葬場として創設 (衣笠村へ貸与という形で市営)
1918 (大正 7)	衣笠村が京都市に編入
1926 (大正 15)	京都市の直営となる
1938 (昭和 13)	全面改修
1939 (昭和 14)	操業開始
1977 (昭和 52)	京都市中央斎場の前身、花山火葬場改築のため、9基を除去し仮設炉を10基増設
1981 (昭和 56)	蓮華谷火葬場を休止。中央斎場に統合。(災害時における京都市中央斎場の分場として維持管理)
2016 (平成 28)	老朽化と必要性の低下により京都市中央斎場分場 (旧蓮華谷火葬場) を廃止
2025 (令和 7)	元京都市中央斎場分場を一般競争入札にて解体依頼するも不成立

この火葬場は衣笠・大北山の山裾に位置し、都市の生活圏と山地の境界に置かれた火葬場である (Fig.10)。

私営で行われていたが、1926年に衣笠村への貸与を経て大正期に市直営化され、1938-39年の全面改築を経て稼働した。1981年、中央斎場整備に伴いに休止され、災害時における中央斎場の分場として管理されていた。しかし2016年に、老朽化と必要性の低下によって、休止以降一度も利用されずに廃止された<sup>12)</sup>。現在旧蓮華谷火葬場は、放置され廃墟と化している (表1)。

#### 5.2. 蓮華谷火葬場の葬送方法

花山火葬場 (京都市中央斎場の前身) の史料には「火葬終了を告げる鐘が三度鳴らされ、遺族が炉前で拾骨を行い、残骨は火葬場背後の山に埋葬された」と具体的な葬送行為が記録される<sup>11)</sup>。蓮華谷火葬場については葬送行為の記録が残されていないが、地域の葬送慣行を踏まえると、蓮華谷火葬場でも同様の部分収骨・残骨処理が行われていた可能性が高いと推定される。

### 6. 現代社会における火葬の効率化

かつて死者を送る葬送儀礼は、その地域単位の人びとによって行われてきた。しかし現代において、「火葬場の遺体処理の迅速化により、人びとが死者と密着する時間と空間の縮小化、つまり生死の中間領域の縮小化を意味する。<sup>13)</sup>」と関沢まゆみは指摘している。この変化は火葬場の単なる実務上の効率化にとどまらず、死と向き合う機会そのものを奪ってきたといえる。

## 6.1. 京都市中央斎場の機能と構成

京都市中央斎場は、花山火葬場と蓮華谷火葬場を統合し、旧花山火葬場を全面撤去し、その跡地を拡張、のうえ、1981年3月に完成した。火葬炉は24基と大規模施設であるため、6基を1つのユニットとする構成をとり、火葬炉にも自動納棺装置を備えた前室を設け、火葬炉の連続性に特化している<sup>14)</sup>。

火葬炉は「ロストル式」を採用しており、焼骨が散乱しやすく、火葬後に人体の形に沿った骨の状態出炉出しされにくい性質が指摘される<sup>15)</sup>が、

一日あたり最大120件を処理できる火葬能力を持ち合わせている<sup>10)</sup>。その結果、京都市中央斎場は、会葬者の滞留空間や、火葬行為に伴う象徴的な「追悼の時間」が相対的に削られている。また、京都市中央斎場の平面・運営・設備は「短時間で多く処理する」ことを前提に構築されているといえる (Fig.11)。

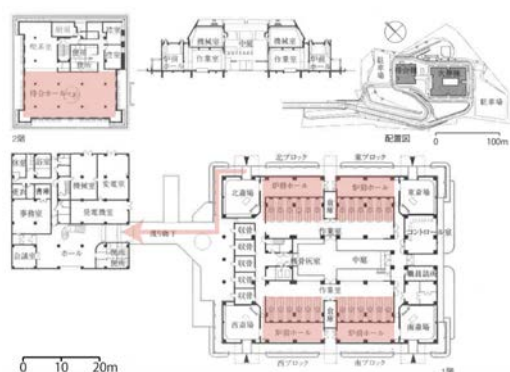


Fig.11 京都市中央斎場 図面

## 7. 旧蓮華谷火葬場跡と死を弔う空間の計画

本計画は、効率化を優先してきた現代の火葬空間に対し、「死と向き合う」とは何かを問うものである。

調査で明らかになった、京都市中央斎場の分場として管理した過去を持ち、現在は廃墟となっている旧蓮華谷火葬場跡を計画敷地として設定する。

古来より京都の山は、葬送地が山裾に配置されたように、生者の世界と死者の世界の境界として機能していた。それは、緩やかな斜面が故人の魂を黄泉の国へと送り出すと信じられていたことに由来する。

本計画において、山の上空を「死」、地上を「生」と捉え、山頂をその間をつなぐものとする (Fig.12)。

地形を生かした葬送行為は、地上から山頂へと段階的に上昇しながら故人を送り出す構想である (Fig.13)。

今後は、旧蓮華谷火葬場の歴史的背景と現代社会における死の在り方について見識を深めながら具体的な葬送儀礼と空間構成を進めていく。

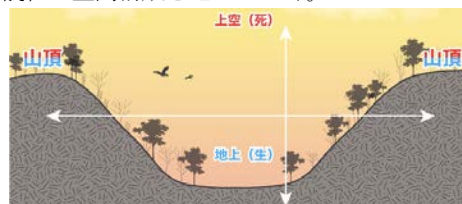


Fig.12 生と死の対立概念図



Fig.13 計画する火葬場の配置図

## 参考文献

- 1) 鹿島光一, 「弔う建築-終の空間としての火葬場-」, 日本建築学会, (2009.6)
- 2) 唐木健仁, 「離島における洗骨改葬-沖縄県与那国島の事例から-」, 日本文化人類学会, (2014)
- 3) 栗国恭子, 「戦後沖縄の〈洗骨〉習俗の変化」, 『壺屋焼物博物館紀要-特集: 厨子』, 16号, (2015.3), p.1-6
- 4) 今井一夫, 「森の火葬場」, 『SD-1982.10』, (1982.10), p.6
- 5) 『新建築』編集部, 「弘前市斎場」, 『新建築』, 新建築社59巻7号, (1984.7), p.222-228
- 6) 槇文彦, 「Recent Work Fumihiko Maki」, 鹿島出版会, (2018.6), p.36-41
- 7) 伊東豊雄, 「自選作品集: 身体で建築を考える」, 平凡社, (2020.8.7)
- 8) 『新建築』編集部, 「瞑想の森 市営斎場」, 『新建築』, 新建築社74巻11号, (2006.8), p.82-101
- 9) 星野裕司, 齋藤潮, 「平安京における葬地の地形構造と都市的機能に関する研究」, 都市計画論文集35巻, (2000), p.793-798
- 10) 京都市, 「京都市中央斎場のあり方検討委員会」, 中央斎場の概要説明資料, (2012.8.6)
- 11) 左右田昌幸, 「花山火葬場について」, 『本願寺史料研究所報31号』, (2006.11.30)
- 12) 京都市情報館HP, 「京都市斎場条例の一部を改正する条例」, [https://www2.city.kyoto.lg.jp/somu/bunsyo/kouhou/h2803/0330/0330\\_34.pdf](https://www2.city.kyoto.lg.jp/somu/bunsyo/kouhou/h2803/0330/0330_34.pdf) (参照2025-9-24)
- 13) 関沢まゆみ, 「民族学が読み解く葬儀と墓の変化」, 朝倉書店, 国立歴史民俗博物館研究叢物2, (2017.3.25)
- 14) 丸善, 「建築設計資料集成(集会・市民サービス)」, 日本建築学会編, (2002.9.1), p.68
- 15) 川嶋麗華, 「火葬における遺骨の取り扱い」, 東アジア文化研究第6号, (2023.2.7), p.211-224